無常を説くマニ教ソグド語文書
——京都大学文学部所蔵の写真資料から——

On a Manichaean Sogdian Fragment Expounding
Vanity of Earthly Life

—— Text preceding Henning's 'Job Story' ——

吉 田 豊^{*}
YOSHIDA Yutaka

ABSTRACT In this article one Manichaean Sogdian fragment is edited. Two old dry plates of the fragment, which was further broken into two pieces, are preserved at the Department of Oriental History, Kyoto University. Although the present whereabouts of the original is not known, circumstances suggest that it once existed in Japan, and that the photographs were made for the late Professor Toru Haneda of Kyoto University, who had a reputation of being a good decipherer of old manuscripts unearthed from Central Asia.

From its contents and handwriting it can be proved that the fragment immediately precedes the so-called "Job Story" published by W. B. Henning (*BSOAS* 11, 1945, 485-87). The combined text spends all 50 lines (11. 28-50 being a 'Job Story') expounding vanity and impermanence of earthly life and bears strong similarity to the "lament for impermanence" found in the *Chinese Manichaean hymnscroll* 11. 83-119. One excerpt will illustrate this. Compare the following Sogdian passage with line 102 of the *hymnscroll*.

(26) ... *rty cnn ZKw pryw ZY cnn šyrxwz-k ZY ZK* (27) *xwtm wxsty c'nkw ZY ZK r'ôch ZY ZKw (xw'kkr'k?) ky ZY kβnh* (28) (')*z-mnw 'wx'n'yt 'skw'nt ZY ZKw 'nw'štk rty pts'r yxw'y'nt* (29) (x)*w 'yw cnn ôβtyk w'nkw 'PZY xwy'r ZK 'yw ôn ôβtyk L' wyn'nt* "He will be separated from his loved ones, friends and relatives like travellers and merchants who stay together for a little while under the same

* 神戸市外国語大学助教授

Associate Professor, Kobe City University of Foreign Studies

roof, but later separate from each other so that they do not meet each other easily.”

世諦暫時諸親眷／豈殊客館而寄住／暮則衆人共止宿／旦則分離歸本土 “The temporal relations of a family, which are mundane truth, How far do they differ from that of staying at a traveller’s inn? Masses of persons stop and rest together for a night; In the morning, they separate and return to their own lands”, cf. Tsui Chi, *BSOAS* 11, 1943, 185.

Such hapax legomena and rare words as *ḍxšt’k* “ripe”, *prkwxs* “swaying”, and *’pw p̄ts̄pnyh* “vanity?” found in the text make the fragment intriguing also from the philological point of view.

○. はじめに⁽¹⁾

京都大学文学部東洋史学科には、筆者が知る限り3種類のソグド語資料が保管されている。第1のものは、モンゴル高原にあったカラバルガスン碑文の拓本である。これについては既にその存在を報告しておいた。⁽²⁾これは跋文から羽田亨が言及する、「三田氏が蒙古に在任中、人をして作らしめたる拓本」の一部であることが分かる。残りの部分は、現在立命館大学に保管されているらしい。これとは別に、ソグド語文書の現物1点と写真資料がある。本稿ではそのうちの写真資料についての研究を発表する。前者はトルファン出土で、『涅槃經』のソグド語訳断片であるが、紙数の関係でここに含めることができなかった。いずれ稿を改めて発表したいと考えている。貴重な資料の公開を快諾された、⁽³⁾京都大学東洋史学科の永田英正教授及び関係者に感謝する。

I. 文書の由来と体裁

京都大学の東洋史学科が保管する古いガラス板の写真資料のなかに、2点ソグド語の文書の写真が含まれている。これらの写真が、どのような経緯で同学科の所蔵に帰したかの詳細は不明であるが、非常に古い写真であることと、同研究室でかつてこの種の文書を研究していた研究者は多くないことから判断して、故羽田亨博士が入手したものに相違ない。内容を検討すると、これらの2点は同一文書の離れであり互いに接合することが分かる。しかもかつて W. B. Henning が研究し発表した、ドイツ・トルファン探検隊将来の文書とも接合

することが明らかになった。⁽⁴⁾

羽田亨が戦前に、ベルリンにある未発表のソグド語文書の写真を入手し得たとは考えられない。また Henning のような研究者が、ベルリンにあった関連の資料を見落としていたことも考えにくい。それ故、ここに発表する2点（実際には1点の2断片）の現物は、ベルリンにあったのではなく、なんらかの経緯で日本に入ったものと推測される。同研究室が保管する『涅槃經』の断片のように中国人の手を介して日本に入ったのかもしれないし、大谷探検隊の収集物が、私的に売り出されていたのかもしれない。今となっては知るすべがない。⁽⁵⁾⁽⁶⁾

Henning はこの文書の離れを発表したとき、残された部分の内容からマニ教徒が用いた説話の断片と考えた。そして ‘Job Story’ と名付けて、マニ教ソグド語の説話に関する論文のなかにこれも含めた。⁽⁷⁾ここで扱う断片はこれに直接先行する部分である。しかも内容を検討してみると、全体はこの世の無常を説くもので、いわゆる説話ではないことが分かる。この世の無常を説くという点では、敦煌出土の漢訳マニ教文献『摩尼經下部讚』（スタイン本：S 2659, 『大正大藏經』第54巻, 1270-79所収）の83-119行にある「歎無常文」とよく似ている。⁽⁸⁾下でも論じるように、いくつかのモチーフは同じであり、両者が無関係であったとは考えられない。

ここで発表する資料は写真であるから、文書学的情報は得られないが、筆者は1992年秋にベルリンの Staatsbibliothek で、Henning が発表した文書の実物を調査する機会があった。TiiD という旧編号とは別に、現在は So13400 の番号が与えられたこの断片は、横 25.3 cm 縦 31.7 cm の大きさで、漢文仏典の紙背を利用して書かれている。漢文仏典は『妙法蓮華經』（『大正』第9巻, 61頁 a 21-b 12）である。筆者の印象では、字体と紙質から7—8世紀のごく普通の写本であるように思われた。これは同様にトルファンで出土した、漢文仏典の紙背を利用したマニ教文献について言えることである。従って、ソグド文のほうはそれ以降、9・10世紀頃のものと考えてよいであろう。⁽⁹⁾なお京大の写真資料とベルリンの文書を接合すると、全体で50行のテキストを回収できる。そのうち28-50行が、Henning によって発表された部分である。

写真版からも明かなとおり、ここに発表する文書では、特に右端の部分の破損が著しい。単に紙が破れているだけでなく、表面がこすれて文字が読めなくなっている。従って多くの場所で満足のゆく読みができず、不明の箇所を残

したまま発表せざるを得ないのは残念である。⁽¹⁰⁾

II. テキストと翻訳

テキスト⁽¹¹⁾

- 1 [](.y ZY nyst ßntk'm^a c'nkW ZY ZKn (s'ty)^b xwyr ZKw
- 2 [txyz pcp'n r](ty ZKn)^c rwxšny myðy nß(n)t ZK t'rc(h 'xš)ph^d
ZY
- 3 [pcp'n rty] (Z)K ßr'xštk p'ðð 'nc'n pcp'n (r)[t](y^e Z)Kw ðxšt'k
- 4 [ßr'k ZK] (pr)kwxs ZY ZKw 'wr'yž pcp'n rty ZK ṛr'yk'yny
ṛwð'k
- 5 [ptš'k'ß] pcp'n myð 'wyn wyspny w'tð'r ZKh m(rch pcp'n)
- 6 [rty](.f 'y)wp't ZKh wyšn kwyšt ZKh r't ZY 'xšywn'y(t)
- 7 [ZY xw](t')wt ZY ms 'nyw ṛrßw žnk'n mrtxm'yt ky ZY pr'ymyð
'ßc'm-
- 8 [pð 'x](šy)t'nt^g ZY nwš'yt L' 'krt'nt p'rZY 'kw ''y'm ZKw mrc
- 9 (m)[y](ð)y^h ZKw wyspw mrtxmy prw šyr'krtyh ZY pr pwrny'-
ny'kh (...š)ⁱ
- 10 [](c't^j rw'n'yt^k 'krt'nt rt)y cnn 'ky prnxwnty m't rty kð'rt
- 11 [](c)nn 'ßc'mpð'yk šyr'kk^l ywxst[y^m r](t)y
- 12ⁿ [](ZKw) nwš'k šyr'kk ZY ZKwy ''ykwncyk šyrw
- 13 [] ZKwy ßwð'nty wštm'xy o rty pyšt 'ky L[']
- 14 [](. L'^o) ßrtwx wm't tnp'rmync
- 15 [š't'wxy'kh? znk]znk'n-'k ''y'mpnwh
- 16 ZY ßn's rtš(w) 'kw ''y'm mðy pr'ṛt ð(r'n)t rty nw-ryž-y ZY
(prw)^p
- 17 pwž-kßty rty xwty xrt'nt rty 'M mrcy pr'w L' rnß't 'kð'r'nt
- 18 p'rZY mwrt'nt ZY nyst 'krt'nt o rty kðry nwkr c'nkW nyw'nt
- 19 [ṛ](nt'k)r'k^q ZY ZKn nw-wrn'k mrtxm'k ky ZY ZKw šyr'krtyh
L' .
- 20 [kwnty] rtšw L' ZKh rw'ny-mynch 'rkh wrnty rtšy 'cw
- 21 [](. ZKn xypð ṛr'yw nwš'k šm'rt rtšy kt'r ZKwy m'ny

w'nw

- 22 [rxnt](y) zṛty mn' ZY myḏ r'm'nt mḏy 'xwšty k'm rtšy kt'r ww^r
23 βz-ny s'št βrt nyw'nty ky ZY m'n'kh 'pw ptspnyh nyβ'xš^s o
24 rty kḏ c'β kwny rtšw prz-ṛ'm 'yḏcw 'np'r nyst pwtkr'y ZY
25 [š](yrw^t β')rṛn'k šyr'k ḏβ'r ZY ZKw pry'npr'ytm ''z-wnh ckn'cw
26 ZY šw ḏβtyw zyt'k βwt^u rty cnn ZKw pryw ZY cnn šyrxwz-'k
ZY ZK
27^v xwtm wxsty c'nkW ZY ZK r'ḏch ZY ZKw (xw'kk^r'k)^w ky ZY
kβnh
28^x (')z-mnw^y ''wx'n'yt 'skw'nt ZY ZKw 'nw'štk rty pts'r yxw'y'nt
29 (x)w 'yw ḏβtyk w'nkW 'PZY xwy'r ZK 'yw ḏn^z ḏβtyk L' wyn'nt

*Bntk'm は c'nkW の上に書き足されている；^b読みに関しては注釈参照；^c文字の下部のみ。読みは不確実；^d初頭の ' は奇妙な形をしている。表面が破損したからか；^er と読んだ文字は奇妙な形で、β のように見える；^f尻尾の長い文字で終わっている。t, k, p などが可能である；^g(šy) の部分は破損しており、読みというより復元である；^h[y] のスペースはないかもしれない。その場合には (mḏ)y 「ここ」と読める；ⁱ(wnyš), (pryš) などの読みが可能である；^j他に (wnt), (p't) などの読みが可能である；^k文字の上部のみ。読みに関しては注釈参照；^l最初 šyrxw と書いて誤りに気づき、書き直したもの；^myxwy-t[y] と読めるが、この付近は動詞がみな過去形であるのでこう読んだ。実際この文書では文字 s はやや奇妙な形をしている；ⁿ12行目は2つの断片に分かれている。(ZKw) の文字の下部は一方の断片にのみ残されている；^o表面がかすれていて、長い尻尾だけが確実である；^p文字の上部のみ；^q文字の上部のみ。読みは不確実；^rあるいは cw か；^sあるいは zyβ'xš；^t僅かな残画のみ。読みは不確実；^u最初 Bnt と書いて、後に n の上に w を書いている；^vこの行のほとんどは京都大学の文書に残されていて、ベルリンにある断片には文字の下部だけしか見えない；^w文字の上部だけが残されており、読みは必ずしも確実ではない。xw'kr''k も可能；^xHenning のテキストはここから始まる。意味のつながりからは29行目で段落が終わるので、便宜のためにこの2行もここに含めることにした；^yHenning は z-mnw と読むが、z の前に1字分

のスペースがある；²この読みについては注釈参照。

(12)
訳

「……そしてなくなってしまうだろう。ちょうど登った太陽に〔沈むことが目前〕であるように；明るい昼のそばに暗い夜が〔目前〕である（ように）；放たれた矢に静止が目前である（ように）；熟れた〔果物〕がぶらぶらし（ついには）落ちてしまうことが目前である（ように）；泥でできた壺に⁵〔碎けることが〕目前である（ように）。ちょうどそのようにすべての生き物に死は目前である。

……かつてこの世を支配していた巨人，王，支配者，首領，及び他の多くの種類の人々は，常住なるものとはならず，最後の死の日には，すべての人々に対して，善行と功德により，魂が¹⁰……になった。そして彼らのうちで幸運で，……し……世間的な富から離れ……〔する者は，〕常住の富と永遠の財を〔獲得し？〕かぐわしい天国で〔暮らすことになった。〕しかし一方，……せず，……に関して心穏やかでなく，肉体的¹⁵〔喜び〕……種々の誤った教えや虚偽〔によって財を為した者は？，〕最後にはそれ（＝この世で貯めた財宝？）を，嫌々ながら仕方なくこの世に残した。そして自分自身は行き，死とは争そうことができず死んで，存在しなくなってしまった。

さて今，悪行の不信心の人で，善行を〔行わ〕ず，²⁰魂のための仕事というものを用意しない人。もし（その人が）……自分の身体を常住と見なすなら，その者はあるいは大胆にも心の中で「私の日はここではいつも増大する」と思いか，あるいはまたこの無益（／無常）なものを与えた人に感謝しなければならないことになる。そしてその者はどれほど多くのことをしても，決して満足することはない。すばらしい贈物や最愛の子供も，有害で²⁵とてもはかない。それらは再び取り上げられることになるからである。そして愛する者や友人，血縁からも引き離される。ちょうど旅人や商人が，しばらくの間は同じ屋根の下に集うが，後には互いに別れ別れになり，再び会うことが容易ではないように。

III. 訳 注

1—5 この部分ではこの世にあるもののはかなさが，いくつかの比喩によって説明されている。上述した「歎無常文」では特に 87-89 行に，そのことが

詳しく論じられている。それによれば、この世の一切はまるで砂漠で見る蜃気楼のようなものであり、この世の栄華は風に吹き飛ばされる雲のようであり、肉体は春の草花がいつまでも青くなく、結局は枯れてしまうようなものだという。

1 (s'ty): 最初の文字 s の読みには不安が残る。もののはかなさの比喩として太陽が用いられるとすれば、登った太陽がすぐに沈むことだと考え、このように復元した。動詞 sn- の過去語幹は st- であり、s'ty の綴りは奇妙だが、短い母音 [a] が文字 ' によって表記されることは珍しくない。GMS §14 参照。

2 [txyz pcp'n]: 未発表のマニ文字資料 (M4551) に、xwr m'xy[y] txyyz pcp'n とあり、この復元が正しいことがわかる。txyz の前にさらに m'x を補うスペースはないように見える。なお M4551 のテキストは、熊本裕教授に恵贈された故 Dresden 教授のノートから引用した。この部分の一部は GMS §1639 にも引用されている。

2 ZY: 行末の ZY はしばしば埋め草として用いられる。これもその例である。⁽¹³⁾

3 δxšt'k: これは初出の形式であるが、コータン語の dišta- と同源で、「熟れた」を意味する語であろう。破損部に Br'k 「果物」を補うと、後続の 'wr'yȝ 「(果物が木から) 落ちる」とよく合う。⁽¹⁴⁾ところでソグド語には「(穀物が) 実る」を意味する δxš- という動詞の現在語幹が在証されており、この動詞と δxšt'k がどのような関係にあるかが問題である。同じ語根に由来する動詞と形容詞かもしれないし、後者が前者の過去分詞であるかもしれない。コータン語では、⁽¹⁶⁾前述の形式は現在語幹 jaj- の過去語幹であるので、後者の可能性が高い。別のマニ教文献によれば、天国では、実を結ぶ樹木は常に青々としていて、その果物は落ちも腐りもせず、虫も付かないという。Henning, BSO-AS 12, 1948, 307 参照。

4 (pr)kwxs: これも初出の語である。熟れた果物が落ちることが問題になっているという筆者の前提が正しいならば、これは落ちる直前の果物の有様の表現であることになる。ところでソグド語には akōč/ākuȝt 「つりさげる」及び ptkwc/ptkwȝt 「釣る、針でひっかける」という動詞が知られており、それらから語根 *kauč- 「つりさげる」を抽出できる。⁽¹⁷⁾prkwxs はこの語根とは無関係ではあり得ず、その語源として *pari-kuxsa- あるいは *fra-kuxsa-

を想定できるであろう。つまりいわゆる inchoative 形の動詞現在語幹から派生した動名詞で、意味は文脈から考えて「ぶらぶらすること」であったと思われる。同じく inchoative 形から派生した名詞に 'ntwxs「努力」があり参考になる。

5 [ptšk'β]: 焼物の壺が砕けることが問題になっているに違いない。壺を壊す動作を動詞 ptšq'f によって表現している例があり、仮にこのように復元⁽¹⁸⁾した。

6—18 過去の人々で、生前に善行を積み天国に行った者と、悪行をなして死に無に帰した者についての説明である。最初のほうでは行の初めのかかなりの部分が失われていて、細部を知ることができない。終わりのほうでは行はほぼ完全に残されているが、ここでも必ずしも意味内容は明かではない。さらに過去⁽¹⁹⁾の人々の筆頭に、巨人や王様があげられている理由も筆者には不明である。

6 'ywp't: 通常「一度」を意味するこの語は、「かつて」の意味で用いられる場合がある。例えば P 9, 78 を参照せよ。

6 r't: サンスクリットの rājan-「王様」から借用された語である。P 7, 26 に rwk'ynt r't (< Lokendra-rāja-) が見える。またサントク・ペテルブルグにある未発表のソグド語文書 (SI: KrIV/862) にも、r't という形式が在証される。同じ断片の m'ywr 'xšywn'yt「孔雀王」を参考にすれば、これも「王」を意味する同じ語であろう。

9 pwrny'ny'kh: 奇妙な綴りだが、マニ文字で在証される pwrny'nyy' のソグド語文字による表記である。

10 [] (c't rw'n'yt): 復元は必ずしも確実ではない。特に最初の部分にはいくつかの読みが可能である。ここでは rw'n を後分とする bahuvrīhi 複合語（「～な魂を持つ」）の複数形とみなした。巨人その他が死に際して、善行や功德を積んだ人々を羨ましく思うことが問題になっていると考えたが確信はない。あるいは彼らが生前の功德によって、再生しやり直す機会が与えられたことを言っているのだろうか。

15 [znk]znk'n'k: キリスト教ソグド語の zng zng'ny を参照せよ。これは F. W. K. Müller and W. Lentz, *Soghdische Texte* II, SPAW, 1934, Nr. 21, 518, line 76 在証される。

16 rtšw ... pr'yt δ'r'nt: -šw が何を指しているか不明である。「歎無常

文」(92行)には「積聚一切諸財宝／皆由惡業兼妄語／無常之日並悉留／仍與明性充為柎」とあり、この世で貯めた財宝は死んだ時に、この世に残していくことになると言っている。それと関連づけてここを解釈した。あるいは、悪人たちは死ぬとき為した善行ないしは功德をこの世に残して行く、つまり悪人は生前に善行を積んでも、それを死後携えて行くことができないことを説いているのだろうか。

17 prw pwz-kBty「無理やりに」: この語を正しく読み、マニ文字で pws-kfty と綴られているのと同じ語であることを指摘したのは Sims-Williams 教授である。Henning は pws-kfty を “under constraint” と訳したが、その訳は nw-ryz-y「嫌々ながら」と共起するこの文脈にもよく合う。⁽²⁰⁾ただし語根 skamb「抑制する」から派生しようとする Henning の語源や、kamp「曲げる」に由来するとする Gershevitch の説は、ここの形式の -z- と矛盾する。⁽²¹⁾有声音がkの前で無声化したと考える方が自然であるからである。しかし今のところ筆者には交替案がない。

17 rnβ't: この語は最初「争う、攻撃する」と訳されていた。その後 M. Schwartz は、ソグド語文献 P 2, 326 及び P 3, 183-91 の rnβ とコレズム語の rnf- を同じ語源の語と見なした。そしてコレズム語の例が文脈から「交尾する」と解釈されるから、これらの語は「交尾する、性交する」と訳すべきであるとした。彼の説はコレズム語に関する限り、一般に受け入れられている。⁽²²⁾しかし P 2 の例はいわゆる浄肉の説明で、殺害によらない10種類の肉を解説するなかの3番目である。第1に老衰、次に病気で死んだものをあげ、次に互いに rnβ し死んだものの肉、さらに4番目には水死したものが列挙されている。この文脈から rnβ が「交尾する」を意味すると考えることはできない。⁽²³⁾

また Schwartz は言及しないが、別のソグド語仏典に、'M žn'kh z'wr rnβ'y「知の力をもって rnβ し……」という一節があり、ここでも「交尾する」と訳すことはできない。⁽²⁴⁾なお P 3 では、雨降らしのまじないに必要な大道具として、作製すべき彫刻の造形が説明されている。そして同じ種類の動物どうしが rnβ する様子を表現するように指示されている。この文脈からは、「交尾する」も「争う」も可能である。⁽²⁵⁾以上を要するに、ソグド語の rnβ は「争う」を意味し「交尾する」と翻訳することはできない。無論本文書における例でも、死と rnβ できないというのであるから、「交尾する」ではあり得ない。コレ

ズム語の例では、原文のアラビア語の表現 *safada* は確かに「交尾する」を意味するが、ペルシア語版では *bar-jast*「飛びかかる」となっていて、必ずしも「交尾する」を意味しなかった可能性もある。

18—23 この部分では、個々の語の解釈にほぼ問題はないが、各部を構成する文のつながりがよく分からない。特に *kt'r* で始まる部分が分かりにくい。従って筆者の翻訳もそれを反映して、内容の不明瞭なものになっている。なお筆者は、18行目の *c'nkw*「～するとき」で始まる節は完結せず、20行目の '*cw*「もし」で始まる節に受け継がれていると考えた。つまり20行目の *šy* は、長い名詞句 *nyw'nt ... wrnty* を指示しているものと解釈した。

20 *rw'ny-mynch: rw'nmyrch* が期待される。おそらく *rw'n* の斜格形を書いてから、思い直して接尾辞 *-mynch* を添えたのであろう。

21 *ZKwy m'ny w'nw [rxnt](y) zyty: zyty* は不定詞なので、これを支配する動詞が先行するはずである。過去不定詞を支配し破損部を満たし得る軽語幹 (*light stem*) の動詞としては、*rxn-*があるのでこのように復元した。ただし必ずしも文脈から期待される意味は得られない。

23 *Bz-ny s'št Brt: Bzn-*「感謝 (の心)」に関しては拙稿 (*Studia Iranica* 13, 1984, 148–49) 参照。なおそこでの筆者の解釈は、後に漢文原典が比定されることにより証明された。⁽²⁶⁾

23 '*pw ptspnyh*: 初出の表現である。キリスト教文献に *ptspyn-*「有益である」という動詞があり、それと無関係ではあり得ない。⁽²⁷⁾ *ptspnyh* は、形容詞 **ptspn-* から派生した抽象名詞であろう。無益なものとは、富や名声などのこの世における繁栄のことであろう。一方、問題のキリスト教ソグド語形の意味も、十分確定しているわけではない。一度しか現れず、そこでの文脈は結局は *ptspyn-* しないこの世の財産を捨てよ、と言っている。つまり「役に立つ」以外に、「長続きする」の訳も可能である。もしそちらが正しいなら、'*pw ptspnyh* は「無常」と翻訳できる。

23 *nyβ'xš*: 従来知られていない動詞 **nβ'xš-* の未完了形であると考えられる。動詞 *βxš-*「分け与える」にはこれまで *pr-* 及び '*n-* が付加された例しか知られていなかった。*n(y)-* (< OIr. **ni-*) を伴う例は、他のイラン系の言語にも知られていないようである。無論 *zyβ'xš* と読んで、*preverb* の **uz-* が付加されたものとも考えることもできる。

24—29 この世での富や栄華 (šyr'k δβ'r 「すばらしい贈物」)⁽²⁸⁾ 及び子供や友人が、結局は離ればなれになり頼りにならないことを説いている。財産や栄華のはかなさは、「歎無常文」の88, 92, 96, 117行目に、子供や親族の頼りなさは、98, 102, 103, 116行目に論じられている。またこの部分の内容は、Henning がかつて発表した TM 393 (=So 18248) の recto l-15 にも酷似している。⁽²⁹⁾

24 pwtkr'y: これも初出の語である。ただし Sims-Williams 教授が筆者あての手紙で指摘されたように、従来気付かれてはいないがムグ文書にも在証されている: 'zw w'nkwy γrβ'm c'-pwtkk'r'y-st ZY tγw 'y-š (B-18, 3-4)⁽³⁰⁾ 「私はおまえがあまりに役立たずであることを理解している」。関連する語にはキリスト教文献の pwtqy 「破壊、崩壊?」及び、仏典の「大殃禍」に対応する pwt'k⁽³¹⁾ がある。語根 *pū 「腐る」に由来することは明かであるが、その過去分詞が持っていた意味の広がりや正確に知ることは難しい。ここでは pwtkr'y は、「役に立たない、不利益を為す」の方向の意味を持っていたと考えた。pwtqy や pwt'k もその方向で解釈できるかもしれない。

25 β'rγn'k: これも初出の語だが、P 2, 1158-59に次のような一節がある: 'pw ''st'nyh β'rγn CWRH 'nwtyh L' 'skwy 「無常で……な身体に頼ってはいけない」。β'rγn は先行する 'pw ''st'nyh と類義語であるに違いなく、「はかない」と翻訳できよう。その意味はこの文脈にもよく合う。意味の点では接尾辞 -'k の有無は無関係であろうが、筆者には β'rγn の語源は不明である。

26 ZY šw ... zyt'k βwt: 動詞 zyn/zyt 「奪う」は、wyšnd fryštyyt w' mrtxmytyty cn dywtyy zyn'nd 「それらの天使たちは悪魔たちからその人々を奪った」⁽³³⁾ のように、「AをBから (cn B) 奪う」という構文になっている。一方受動態では zytyy β't cn γβtyy γmbnyy 「彼は苦勞し(て得)た苦勞(の結果)を奪われるだろう」⁽³⁴⁾ のように、「BはAを (cn A) 奪われる」という構文をとる。つまり奪われる人にも物にも前置詞 cn が付加され得た。この構文の曖昧さから、本来不必要な šw が添えられたのであろう。⁽³⁵⁾

27 xw'kk'r'k: 読みに不安は残るが、「商人」を意味する語は確かに文脈から期待される。ちなみに「歎無常文」の次の一節(102行)は、この部分と非常によく似ている: 「世諦暫時諸親眷／豈殊客館而寄住／暮則衆人共止宿／旦

則分離⁽³⁶⁾本土」。

29 ðn; ゾグド文字表記では、この前置詞は通常 ðnn と綴られる。おそらく後続の L' に影響された誤写であろう。

IV. Job Story

上述したように 28-50 の部分は Henning によって既に提出されており、ここに改めて発表する必要はない。30行目以降は 24-29 行目で説明されたことを具体例で示している。その具体性から説話の一部と誤解されたのであろう。なお Henning によって提出されたテキストと翻訳には、わずかではあるが、その後の研究により改善できる点や、異なる解釈や読みを提案できる箇所があるので、下ではそれらを列挙しておくことにする。⁽³⁷⁾便宜のために、接合後の文書の行数だけでなく、Henning のテキストの行数も与えておいた。

39/12: 'stwrpð'k (H[enning]), 'stwrpðk (Y[oshida]). 確かに ð と k の間には 1 文字分の間隔はあるが、文字 ' のストロークが見えない。後で書き足したものがかすれてしまったのかもしれない。

40/13: [pr] 'nr'ðcykw (H.), [pr ʔr](β) nr'ðc'ykw (Y.). 文字 β の長い尻尾の一部が見える。さらに pr を補うスペースもある。H. も指摘するとおり、後続の ''Bryncykw の上には本文とは異なる手による書き込みがある。H. は pš...w と読んで「w を挿入せよ」を意味するメモと解釈した。最後の w に関してはその解釈が正しいことは明かであるが、先行する部分については pr ʔrβ と読み、pr ʔrβ ''Brywnncykw と読まそうとしたものと解釈できるかもしれない。ただし p 以外は個々の文字を確認できないほど乱雑に書かれている。

41/14: [...].m'yt (H.), [mrt](x)m'yt (Y.). 「町全体で、人々の間で」と訳され、文脈からも支持される。

42/15: [...]r (H.), [yw']r (Y.). 当時 H. は yw'r 「別れること」を「悲しみ」を意味するものと誤解していた。BSOAS 12, 1948, 310 参照。rtynwkr pts'r βwt ZY ʔyrtr ZY [yw']r cnn z't'yty ... はやや奇妙な構文だが、2 番目の ZY は埋め草であり、「そしてそれから息子たちから別れることになり……」と翻訳される。

43/16: [yxw'yt ZY tr] 'z-mnyh (H.), [rt](pts'r ZKwy) 'z-mnyh

(Y.). ほとんどが破損しているので、いずれにしても不確実な復元を提案する意味はないが、42行目で [yw']r を想定すれば、当然この部分の復元も変更しなければならない。

44/17 : [...]xs'nt (H.), ['r]xs'nt (Y.). この行の yw'r の意味が明らかになったことにより、翻訳を改善する必要がある。筆者は子供たちから別れたこの男が、別離していない人 (nyw'nty mrtxm'y ... ky' ZY ... L' ZK ''zwnh yw'r ['krt](w)ð'rt) に助けを求めることになることを説いているのだと考えた。

48/21 : 'sp'xšt (H.), 'sp's'yt (Y.). 読みは H. のほうが優れている。しかし動詞の過去語幹は文脈からは意味をなさず、H. 自身もこれを “menial” と翻訳している。'sp's'k と prm'n-ptγwš'k の組合せは、仏典にも在証される。BSTBL, 22, line 63 参照。

V. おわりに

ソグド語を日本で研究する者として、日本に入ったソグド語資料の研究と公表には責任感のようなものを感じている。私蔵に帰したものはともかく、公の機関が保管するものだけでも公表できれば幸いである。なお龍谷大学図書館蔵の文書に関しては、既にカタログを作成し、あわせて特に重要な文書については録文と翻訳を付けておいた。⁽³⁸⁾ そこに含まれる全資料の写真と研究が、龍谷大学の善本叢書の一冊として刊行されることになったことは望外の幸せである。

注

(1) 本稿では東洋学の論文で通常用いられる略号以外に次のものが現われる：BSTBL=D. N. MacKenzie, *The Buddhist Sogdian texts of the British Library*, Acta Iranica 10, Tehran-Liège, 1976; GMS=I. Gershevitch, *Grammar of Manichean Sogdian*, Oxford, 1954; P=Pelliot sogdien, in: E. Benveniste, *Textes sogdiens*, Paris, 1940.

(2) 吉田豊「カラバルガスン碑文のソグド語版について」『西南アジア研究』No. 28, 1988, 52 頁参照。この機会に拙論の25頁の表にある重大な誤値を訂正しておきたい：正しくは Fr 5 の図版は XXXIV に、Fr 6-9 の図版は XXXIII に見られる。なお1994年7月にモンゴル共和国で実地に調査された森安氏によれば、Fr 9 の位置は筆者が想定したものではあり得ないとのことである。この発見は近い将来発表されるので、それを先取りすることはない。

- (3) イラン語のものとしては、別にマニ文字で書かれた大谷探検隊将来の文書の写真も保管されている。この断片に関しては既に研究を発表した。Y. Yoshida, “On a Manichaean Middle Iranian fragment lost from the Otani collection” (崎山理・佐藤昭裕(編)『アジアの諸言語と一般言語学』東京、三省堂、1990、175-81頁) 参照。
- (4) この点は1983年に東京で開催された、国際東洋学会議において口頭で発表した。発表の要約は *Proceedings of the thirty-first International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa*, Tokyo, 1984, 989-90 に掲載されている。
- (5) この断片とともに表装されているウイグル語文書は、「吐魯番から出土し、曾て新疆省に布政使として在任した王樹柎氏の手に帰したのであったが、その後転輾して昨年(=1929年:筆者注)」京都大学東洋史研究室に入ったという。『羽田博士史学論文集 下巻』京都、1958、325頁参照。
- (6) 大谷探検隊将来の文書類のすべてが龍谷大学に入ったわけではない。例えば筆者がかつて発表したマニ文字文書の現在の所在は不明である。上記注(3)参照。また同一の文書の離れが、ベルリンのコレクションと大谷探検隊の将来物に分かれている例も知られている。例えばソグド語文書では、西域文化資料の9133号は、ベルリンのSo 14842 と同一文書の離れである。この点は別に発表する予定である。
- (7) W. B. Henning, “Sogdian tales”, in: *BSOAS* 11, 1945, 465-87 (特に 485-87) 参照。
- (8) この漢文文献についての研究は多いが、「歎無常文」の翻訳を含むのは次の2点だけである: Tsui Chi, “Moni chiao hsia pu tsan”, *BSOAS* 11, 1943, 231-42; H. Schmidt-Glintzer, *Chinesische Manichaica*, Wiesbaden, 1987. 特に後者は『大正』のテキストに、写本での行数を添えてあるので便利である。
- (9) この年代に関しては、拙稿「大英図書館及びロシア科学アカデミー(サンクト・ペテルブルグ支部)所蔵のソグド語文書について」(準備中)も参考にされたい。
- (10) いくつかの難解な箇所について、ロンドン大学の N. Sims-Williams 教授から有益な教示を得た。記して謝意を表す。なおこの文書にはウイグル語(17, 23, 24行目)とシリア語(25行目)の書き込みがあるが、それらは筆者の手に負えないので、ここでは扱わない。
- (11) テキスト中の〔角括弧〕は完全な破損部を表し、(丸括弧)は部分的な破損部で、文字の一部が残っていることを示す。○は写本に見られる句読点である。
- (12) 訳文の中の〔角括弧〕は破損部を補ったものであり、(丸括弧)は訳文の日本語を理解しやすくするために補った部分である。
- (13) 埋め草については Sims-Williams, *JA* 269, 1981, 350, n. 14 を参照。
- (14) この動詞に関しては *GMS*, 309 参照。
- (15) この動詞に関しては, D. Weber, *Die Stellung der sog. Inchoativa im Mitteliranischen*, Göttingen, 1970, 165 参照。

- (16) その場合現在語幹から二次的に派生したとするか (<*daxs-ta-), *-s- によって拡張された語根から派生したするか (<*daxš-ta-) 2つの可能性がある。R. E. Emerick, *Saka grammatical studies*, London, 1968, 43 参照。
- (17) これらの動詞及び語根, さらに同源の諸語については Sims-Williams, *BSOAS* 42, 1979, 135 参照。
- (18) Henning, *JRAS* 1944, 143 参照。
- (19) ここで言及された巨人は, マニ教の7聖典のなかの『巨人の書』に登場する巨人に違いない。『巨人の書』に関しては, Henning, *BSOAS* 11, 1943, 52-74 参照。
- (20) Henning, *BSOAS* 11, 1945, 469, n. 1 参照。
- (21) *GMS* §369 参照。
- (22) Schwartz, *ZDMG* 120, 302; M. Samadi, *Das chwaresmische Verbum*, Wiesbaden, 1986, 171; MacKenzie, *JRAS* 1988, 197 参照。
- (23) Schwartz, *ibid.* は, 7番目に互いに殺し合って死んだものの肉が言及されているから, この例は「争う」ではあり得ないとするが, あまり強い反論ではない。原文には殺害によらない肉を網羅的に, しかも相互に過不足なく列挙しようとする意図がないからである。
- (24) *BSTBL*, 42, 11. 145-46 参照。Benveniste は rnβ の意味を論じ “lutter, combattre” と解釈した際, この例に触れたが, 異なる語と見なしていた。*Textes sogdiens*, Paris, 1940, 197 参照。一方 MacKenzie は Schwartz にも Benveniste にも言及せず, “attack” と訳している。*BSTBL*, 43 参照。ただし Benveniste, *ibid.* が同じ語の異なる表記であると考えた rnp は, 奴隷を虐待することを意味するので, rnβ とは別の語と見なすべきであろう。吉田他『内陸アジア言語の研究』Ⅳ, 1988 [1989], 20頁参照。
- (25) ただ筆者にはこの様子が, Ibn Hawqal の伝えるサマルカンドの街角の彫刻と酷似しているように思える: “Astonishing figures are cut out of cypresses, of horses, oxen, camels, and wild beasts; they stand one opposite the other, as though surveying each other and on the eve of engaging in a struggle or combat”. W. Barthold, *Turkestan down to the Mongol invasion*, 2nd ed., London, 1958, 91 参照。この比較が正しいなら, P 3 の例も「交尾する」とは訳せないことになる。
- (26) K. Kudara and Sundermann, W., *AoF* 18, 1991, 250-51 参照。
- (27) Sims-Williams, *The Christian Sogdian manuscript C2*, Berlin, 1985, 98 参照。
- (28) これはむしろ賄賂のようなものを指すのかもしれない。中世ペルシア語の文書 (M 727a, verso 4-6) に 'wd p'rg d'sn 'wd pdyst'wg'n ny pry'dynd pd h'n rwc 'y wdnng 「賄賂も贈物も約束も, その苦しみの日には助けにならない」とある。Henning, *Transactions of the Philological Society*, 1945, 152 参照。

- (29) Henning, *JRAS* 1944, 137-38 参照。
- (30) この文書に関しては V. A. Livšic, *Sogdijskie dokumenty s gory Mug*, II, Moscow, 1962, 123 参照。
- (31) 拙稿『アジア・アフリカ言語文化研究』27, 1984, 83頁。および Sims-Williams, *op. cit.*, 55-56 参照。
- (32) Benveniste, *op. cit.*, 184 は不明であるとしながら、試みに *βrynh* 「ありさま」と比較しているが、正しくない。
- (33) Henning, *BSOAS* 11, 1943, 68 Text G, 8-9 参照。
- (34) Henning, *Ein manichäisches Bet- und Beichtbuch*, *APAW*, 1936, Nr. 10, 51, f78-79 参照。
- (35) ここでは *šw* は贈物や子供を奪われることになる人を指示しているはずであるから、結局それは受動文の主語の役割を果たすことになる。最近 Sims-Williams は、2人称の冠詞及び代名詞の主格形 *šw* の存在を指摘しているが、2人称の要素はここでは期待されず、これをその例と見なすことはできないだろう。Sims-Williams, "The triple system of deixis in Sogdian", in: *Transactions of the Philological Society*, Vol. 92, 1994, 41-53 参照。
- (36) 「諦」の字は解釈しにくい。あるいは「滞」の誤写と見なし、「この世にしばらくの間(共に)滞在する親族は……」と解釈すべきだろうか。「世諦」を「この世の真実 (die irdische Wahrheit)」と翻訳するのは如何なものだろうか。H. Schmidt-Glintzer, *Chinesische Manichaica*, Wiesbaden, 1987, 23 参照。
- (37) 筆者は文書の実物を見た際、愚かにも Henning の読みを確認し忘れた。幸いにも以前 R. E. Emmerick 教授は、ハンブルグにあるこの文書の写真を送って下さっていた。今回はこの写真を利用した。写真の利用を可能にして下さった Emmerick 教授及び A. Degener 博士に感謝する。
- (38) 百済康義・吉田豊・W. Sundermann (編) 『龍谷大学所蔵大谷探検隊収集中央アジア出土イラン語断片目録』(科学研究費研究成果報告書) 1993年3月参照。